

優良農家の紹介

大規模稲作にブランコいちごを！

姫路市船津町の福永英世さん（59歳）は、1985年に会社を中途退職し、水稲の大規模経営を目指し営農を開始した。地元集落、近隣集落、遠方集落へと農地の集積を図り、大規模稲作経営を確立した。

しかし、たび重なる米価の値下げは、大規模稲作福永氏にとっても大きな転換期となり、活路を見出し農閑期の収益向上のため、1998年に1360㎡の施設いちごを導入した。1999年には有限会社「福永農産」を設立。2000年には認定農業生産法人となり、地域農業の担い手として信頼されている。また、いちごの規模は2000㎡に拡大し、現在は水稲30haとの複合経営を展開している。

1 いちごは省力化を追求

水稲30haを管理しつつ、施設いちごの栽培を行うには、極力、省力化が図れる栽培方式が必要となる。

検討した結果、栽培は滋賀方式の高設栽培システム、育苗は、プランターに親株を定植し親株が移動できる岡山方式の空中育苗システムを選択し、省力化を追求した生産方式が完成した。

2 いちごの定植時期を改善

大規模稲作農家のいちご栽培で最大の問題が、水稲収穫時期といちごの定植時期が競合することである。定植は、いちごの作柄を大きく左右する大切な作業であるから大規模稲作との複合経営を確立するため、いちごの定植時期の改善に取り組んだ。毎年、試行錯誤を重ねた結果、定植時期を①米の保冷庫を有効活用し、短期株冷蔵処理（7～10日程度冷蔵）による水稲収穫前②9月上旬採苗による水稲早生種収穫後の若苗定植の2回に分けた。収穫開始時期は、①では12月上旬、②では12月中旬を実現すると共に、収穫のピークも分散でき好成績を上げている。

3 ブランコいちごで直売

収穫時ベンチからぶら下がる果実の姿は子どもがブランコをする様子に似ていることから、「ブランコいちご」とネーミングした。販売はハウスのすぐそばに直売所を設置し、朝収穫した新鮮で美味しいいちごを直売している。

パッケージは500g入りボンカップのみで、ボリューム感を持たせており、贈答用は段ボールの化粧箱で2パック入りとなる。

当初は、思うほど売れないときがあり苦勞されたが、ブランコいちごのネーミングも効を奏して年々お得意さんが増え、順調に販売ができています。



ブランコいちごに取り組む福永さん

4 今後の展開

いちごは、まだまだ売れる品目だと感じており、水稲作業との競合も解決でき、規模拡大を検討している。また、露地野菜、施設果樹等の試作に取り組み、いちごに次ぐ品目も検討している。労力においても、現在の労力は二人で、農繁期に雇用を導入する程度だが、今後は規模拡大と合わせ、常時雇用を検討している。

井澤 嘉隆（姫路普及センター）

ひょうごの農業技術 No.120

平成14年3月1日（隔月刊）

1部250円（申込先・県立中央農業技術センター）

兵庫県立中央農業技術センター（0790）47-2400

兵庫県立北部農業技術センター（0796）74-1230

兵庫県立淡路農業技術センター（0799）42-4880